

# 郷土の祭 今年も熱く 筑前木屋瀬祇園祭



木屋瀬祇園山笠の始まりは博多祇園山笠を源流として、北部九州一帯に形の似た山笠が分布したように、博多の風俗に類似した祭祀行事が、周辺部にある木屋瀬にも伝わったものといわれています。

いよいよ木屋瀬祇園祭りの季節が近づいてきました。輪番制による今年の当番町は、赤山(本町六町)が本町、総取締役は、石津亮さん、青山(新町七町)が中央町、総取締役は川崎秀人さんとなっています。

## 寄せ太鼓

北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会 広報部会  
北九州市八幡西区木屋瀬三丁目16番26号 (〒807-1261)  
TEL 093-619-1149  
FAX 093-617-4949

この飾り人形は当番町の肝煎りで、今年  
は赤山が三国志と桃太郎。青山は女の戦国

須賀神社正面にある山笠会館で青年会を  
中心とした若者達が飾り人形を手作りで  
製作しています。

須賀神社参籠殿には、奉納山笠絵馬額が  
掲げてありますが、江戸時代後期から明治  
時代までは岩山(張りぼての岩を高く積  
み、上は人形を飾る形の山)でありまし  
た。明治末期には、車輪の付いた屋台造り  
の曳き山笠へ変わり、さらに大正初期の電  
線架設で、高さは約四メートル程まで低く  
なり、それでも電線との接触を防ぐために  
「上見」という役が屋台の上に乗って見張  
りをしていました。

木屋瀬祇園祭りの最大の圧巻は山笠で  
あり、その山笠を曳くことによる町民の結  
束と、人と人との一体感が培われているこ  
とは、今も昔も変わらないものでありまし  
ょう。

## 7月9日・10日 木屋瀬文化の“華” 祇園祭の熱い夏

このように歴史と伝統に培われた木屋  
瀬祇園には、町民の熱い思い入れがありま  
すが、当今、少子高齢化や経済的な条件な  
ど課題もあって決して問題なしとしませ  
んが、「歴史的な文化遺産」として、若き世  
代へ正しく継承していく風潮は残されて  
いくものと信じています。

人形造りの中心的存在の、野口大輔君は  
「専門的に勉強したのではなく、見様見真  
似、試行錯誤を繰り返しながらの人形造  
り」と語ってくれました。そしてメンバ  
ーは皆、木屋瀬祇園に熱い思いを持ち、こ  
の  
上なく祭り好きといえます。

と東北仙台にちなんだ飾り人形と決まり、  
五月初めから毎日十四、五人が集い人形造  
りに精を出しています。



こやのせ座広報部会長 徳永興紀

宿場町木屋瀬。心に郷土が染みてくる。歴史とふれあう記念館。

筑前箱崎の松原や松浦湯に、大きく詩心を引かれて  
いた連歌法師宗祇は、文明十二年の秋筑紫路の旅に出  
た。その途路亦間ヶ関より若松へ、若松より川に添い  
て上り木屋ノ関へ旅の疲れの草枕に、天神様よりまよ  
けの扇を授かった話は有名である。その夜の木屋ノ関  
の旅枕は、宵待ち月のもとに静かであった。

「月月に見る月は多けれど」と歌にある月光の中で、  
日本三大女神の内の弁財天の祭典が行われる。江ノ島  
と鶴岡八幡の弁財天は、美女であり全裸である。この  
神は生きて実在されていると信じられ、生きて実在さ  
れる神には季々の衣服を、お着せするものと考えられ  
ていた時代のお姿である。神の裸身に現代衣服をお着  
せし女性美を創り、その美を授かりたいと  
願う女達が集まり月の光の中で華やかな祭  
典を行う。宮島の弁財天は、平清盛が仰ぎ  
見たような月の下を、女達が芒と萩の小枝  
を持って参拝する。恋愛の神と信ずる人も  
多く、月の光も匂い立つほどの美の祭典と  
なる。木屋瀬長徳寺境内の弁財天は、長徳  
寺と本町丁内と新町丁内とで祭典が行われ  
る。白地の大幟がはためき、お燈明や提灯  
の明かりの中で、祭主はボトボトと太鼓を  
打ちながら祝詞をあげる。幸福の神と信仰され参拝者  
も多く、世話人は接待に忙しい、町裏の弁財天小路が、  
明るく美しくなる月の夜の祭りである。

木屋瀬東部に、正月十五日に行われる尻叩きと言う  
行事があった。橙を輪切りにし中身を除き、お椀形の  
皮に紐をつけ、これを持って物影に隠れ気付かれぬよ  
うに注意しながら里帰りの花嫁さんや、娘さんのお  
尻を叩くのである。いたづらっ子が集まりお姉さん達  
がいつまでも幸福であるようにと願う行事であり、八  
所神社のお月さんもニコニコと面白そうである。この  
他に「メエゲンチョ」や盆踊り等の月明かりの中の行  
事は、いろいろあったようである。その中で野面の盆  
踊りは今も盛んである。芦屋の歌舞伎役者の手ほどき  
を基とした踊りで「夏ははたる、うつつ白波」等が踊  
られ、踊り子は紅白の布で顔を包むと聞く。又、豊前

地区に見受けられる褒詞と言う仕草が伝えられている。  
見物人が物影より踊りをほめたたえる、これにお答え  
して御礼に踊る、筑前では珍しい行事である。

鯉の里、城下町の津和野の踊りも、月の明かりを避  
けるように、黒い布で顔を包みて踊る。無形民俗文化  
財であるが、これは武士が女装して黒い布で顔を包み  
敵に近付き戦いに勝ったので、これを永久に伝えるた  
めに踊りの姿として残したものである。

福岡県民俗無形文化財、木屋瀬宿場踊りも「今宵の  
月は見えつかくれつ面白や」「寝屋の軒端に月もれて千  
草の虫の」と月を歌い月に踊っている。享保年間より  
昭和の現在まで、同じ歌と同じ踊りを、大事に歌いつ  
づけ踊りつづけながら木屋瀬の、おのこ、  
おみなは先ずこの踊りを御仏の供養にささ  
げおとなも子供もただ楽しさに踊り、心に  
心が触れあい溶けあいて、親しみ深い交流  
の和を広げている。

## お月様と木屋瀬

### 踊らして見たき姿やぼんの月

こうした踊りは遠賀川沿線の集落には盛  
んに踊られていたが、次々に消えている。  
こんな中でも今も尚、受け継がれているものに彦山踊、  
日若踊、三申踊、ハネリ踊がある。いずれも県無形民  
俗文化財であり、思案橋と呼ぶ歌を、主として用いて  
いる所に古代遠賀川文化としての共通点があり、貴重  
な民俗文化遺産である。

こうした姿も形もない、無形文化財をいつでも表現  
出来るように、保存するためにはあれこれと筋の通っ  
た考え方もあるにはあるがどの道を選ぶにしても、先  
ず自らをなげうって踊りに取り組み、同じ考え方の多  
くの人々の心の和をもって、踊りに加わっている人も、  
見ている人も一体となって郷土芸能の集団美を表現す  
るために努力しなければ、消えてしまうだろうと、人  
も町も寝静まった、真夜中の月と話したことであった。

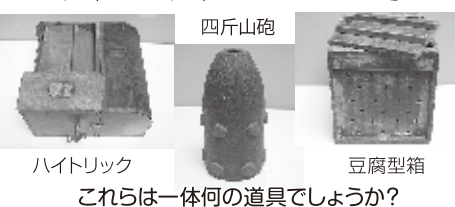
【柴田豊廣遺稿集】より

本町 柴田由美子

### 第43回企画展

## なんじゃろ館

～じっちゃんとはっちゃんに聞く昔の道具と暮らし～



四斤山砲  
ハイトリック  
豆腐型箱  
これらは一体何の道具でしょうか？

第43回企画展は「なんじゃろ館～じっちゃんとはっちゃんに聞く  
昔の道具と暮らし～」です。開催期間は7月20日(水)～8月31日(水)  
です。「江戸あかりの民藝館」ご協力のもと、昔の道具100点ほど  
の展示を予定しております。

また、6月26日(日)まで開催してお  
りました「写真の歴史と木屋瀬の歴史」展  
の来場者は175名(6月10日現在)で  
した。皆様のご来館誠にありがとうございました。



写真の歴史の展示風景

### 新職員紹介

学芸員  
高田佳奈



大学では映像技術や写真を専攻していました。出身は博多と遠いですが、木  
屋瀬の雰囲気がとても気に入っています。私が好きになった木屋瀬の良さを  
色々な方に広めていきたいと思っています。新卒ですので、社会人として  
も至らないところがあると思いますが、よろしく願いいたします。



### 木屋瀬宿人馬方・下役 利右衛門 乍恐申上ル口上之覚 其の七

木屋瀬みちの郷土史料保存会 松尾 良美

この度は、利右衛門と申す下役より事件の概要を口上書で遠賀・鞍手御郡御役所に出している。人馬方の下役とは、公用の荷物や旅客の為に宿場に人馬継立などを留意させるのが人馬方であり、その部下は木屋瀬宿には十二人が従事していた事が、嘉永年間の史料館の展示文書に記されている。荷物の長持運びや駄馬や人足を指揮監督する才料も下役であつて、当然利右衛門もその人であつた。

口上書の冒頭に次のような文面で書かれている。「一、公義御目附様長崎表江 御下向六月十二日木屋瀬宿御登休被為様候 処御同勢之内御下々より酒代仰付致候様候 申入候二付請答左ニ奉申上候事」

このことは、幕府の役職である若年寄・老中に次ぐ重職で旗本や御家人の監督に当たったの指図を受ける御目附（旗本と御家人の監察役）の役人様が、長崎に向かつて行く途中の六月十二日。木屋瀬宿で昼の休息中に、供として連れてくる身分の低い家来衆より、酒代を出すように要求されました件で、その詳細は左記の通り申し上げます。

一、御供廻りの方より、当木屋瀬宿の人馬方下役に酒代（飲み代）式朱（金貨で二両の十六分の二）差し出すように申されましたが、兼て

之（前々からの）御趣意（役所よりの達示）を伝えてお断り申し候得共（次第ですが）再応（何度も）引合候（申し述べられる）なので、宿役共と相談致しますと答えた次第です。

一、御小人目附（武家奉公人で雑用に從事する供侍を監視する役）の御家来四人より酒代（飲み代）八百文（銭貨の単位で普通一文銭九十六枚で百文として通用した）を黒崎宿と同様に、心付（心にかけて金品を贈る）を差し出すように申されましたが、当宿では御趣意（役所よりの達示）を伝えて、お断り申し上げた事を御役所へ申し述べた次第です。

一、右の外に、御家来之駄荷（駄馬に付けた荷物）の才料（御目附一行側の指揮監督者）と長持（衣類や調度品を入れた蓋付きの箱）才料よりも、段々（いろいろと）酒代心附の無心（金品をねだる）の儀（関しては）申され候得共（次第ですが）仕向之儀（金品の用立に關しては）堅（嚴重に）御停止二（役所より差し止め）に、相成居候（そのようになつております）段々（以上）の理由で、相断置申候（申し出を拒否しました）

以上の口上之覚の如く、今回は供侍の合羽や法被の紛失についての弁償、宿継ぎ中での両掛の破損に対する繕料（修繕代）等の請求でなく、何等過失のない宿場人馬方に対する金銭要求の強要である。

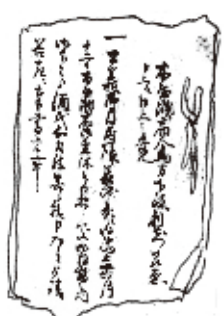
### 幕府御目附供侍、木屋瀬宿で酒代を強要!

覚書の顛末について、先方御供廻りの藤五郎と申す者に出会（出合う）した時に交わされた問答は左記の通りである。

「我々下向中の御供廻り達より心附を差し出す旨申し伝えてお断り申すに、金三両程を用立ては如何か」と申し候に付き、「左様な大造（高額の金子）の儀（用立て）は逆も出来ません」と相答えた処、「然者（それならば）何程（どれほど）か」と申され、「金壹兩二分ぐらゐ、大ならば……」と相答えました。

この交わされた言葉から、私なりに納得出来ない点を挙げていきたい。心附とはいわが酒代の強要であつて、公式で休泊する武家の供侍が金品を宿場の問屋や人馬方に要求する事が恒常化されている事は、文面の中に『酒代八百文を黒崎宿同様に……』と記されているので推察できる。次には、『兼而之御趣意を……』とあるように役所の達示と言つて断つておきながら、再度の強要に応じた事。更には、法外な金額の三両の要求に、半額の壹兩貳分を提示した件である。

この「口上之覚」には、最終的には何程の金額で決着付いたのか不明で、唯々「私儀塚飯御泊座所迄罷越候之処……」と記述のように、下役利右衛門は幕府御目附一行の次なる宿泊所の飯塚宿迄も決着の為に向いている。



### 総会無事終了

平成二十三年四月二十二日、こやのせ座におきまして、第十一回北九州市立長崎街道木屋瀬宿記念館運営協議会総会が開かれました。

平成二十二年事業報告決算報告平成二十三年事業計画案・予算案・組織改正案が議案として審議され、すべて承認されました。

### 役員紹介

- 理事 長・高宮 歳継
- 副理事 長・松尾 良美
- 副理事 長・柴田 泰助
- 副理事 長・野口 靖彦
- 副理事 長・徳永 興紀
- 理事 長・千々和 裕
- 理事 長・高崎 尚康
- 理事 長・石橋 長三
- 理事 長・近藤 浩
- 監事 長・松尾千代子

### 新広報部会長挨拶

木老連を代表する形での参画となりました。早速、広報担当を仰せつかりました老齢の新参者です。よろしくお願いたします。  
(広報部会長 徳永 興紀)

### 第22回 扇天満宮



扇天満宮は、木屋瀬のシンボリック的存在である遠賀川土手の大銀杏の直ぐ下流の土手沿いに鎮座されています。境内には三神が祭られており、左側には、「金毘羅さん」、右側には「庚申さん」が祭られ、中心の社が「扇天満宮」です。大宰府天満宮の菅原道真公を祭神とする天神様です。

さて、今年の三月十一日に、千年に一度といわれる大震災が東北地方に起き、津波や地震で死者、行方不明者が二万人を超え、家屋の流失は数が知れませんでした。自然の猛威を今更ながら現代人の私達に知らされたようです。昔から日本人は自然の脅威をよく知り、巨岩や巨木、海や川、山などを神として崇めてきました。その神々から人間への使者として、雷を大畏恐れ雷に対する祈願、雷神「天神」信仰が篤かつたようです。今から千百年前の西暦九百一年、宮中の右大臣であつた菅原道真は、理不尽な理由で大宰府に左遷され、二年後の延喜三年、失意のうち亡くなりました。道真の死後、都では疫病や天変地異が頻発し、度々宮中にも落雷があり死者傷者も出ました。都の人達は、これは道真公の祟りではなからうかと恐れ、その怨霊を鎮めるために、京都に北野天満宮を建立し、又、九州に大宰府天満宮を建立し鎮撫に努めました。その後、天神信仰も時代と共に移り変わって行き、天神の雷神信仰から、平安時代には天神様は慈悲と正直の神として信仰され、又、江戸時代に入ると道真公が優れた学者、歌人であつたことから、天神様は、学問の神として崇められるようになりました。



さて、木屋瀬の「扇天満宮」ですが、観応元年（1350年）以前からこの地に鎮座され、久保崎天神と呼ばれていました。文明十二年（1480年）、当時、都第一の歌人と称せられた飯尾宗祇が、大内政弘の招きで山口へ下向し、その後、政弘の勧めで大宰府天満宮を参拝しますが、その道中三十二日間の旅日記「筑紫道記」を大内氏に献上しました。その「筑紫道記」に、「こやのせ」という所の禅寺で一泊し、守護代陶氏の館で連歌の会を催したと記されていたのです。そのとき詠まれた発句が「ひろくみよ、民の草葉の秋のはな」の歌です。又、その禅寺で、天神と名のる男から扇を賜る夢を見たとも記され、その後大宰府天満宮に参拝すると、深野筑前守から実際に扇を頂き、まさに「正夢」であつたと記されており、それを伝え聞いた木屋瀬の村人達は、久保崎天神を扇天満宮と呼ぶようになったと伝えられています。その事由を江戸時代の国学者伊藤常足が記した石碑が境内にあります。また、扇天満宮は、元来は土手の銀杏の木に近いにありましたが、大正六年、遠賀川堤防の改修工事で現在地に移転したのです。今も木屋瀬では、毎年五月には、扇天満宮祭と学神祭が執り行われ、学神祭では、新一年生が学問の神様菅原道真公にあやかり、「うめ」「うし」を毛筆で揮毫し奉納しています。木屋瀬は、今もこのような伝統の文化が息づいています。

桶若葉「うめ」「うし」書きし一年生  
つばくろや宗祇ゆかりの天満宮  
(本町 野口靖彦)

### 第10回 木屋瀬芸術祭

5月のゴールデンウィーク（3～5日）に開催いたしました期間中、今年も延べ800人を超える参加・集客で木屋瀬宿記念館は大いに賑わいました事をご報告申しますと共にご協力に感謝致します。

3日は北九州市の至宝マイスターの皆さんが「熱き心」で語る「北九州市の近未来」をテーマに第10回記念講演を行い、夜には「古木雅士」のこやのせ座ピアノコンサートで気持ち良く響きわたる音色に癒され、ゆっくりと流れる時間を楽しんで頂きました。

4日は武野要子女史による基調講演「筑前木屋瀬八幡伝説 伊藤小佐衛門 其の十巻」、「長崎街道筑前六宿フォーラム」では六宿のゲスト、コーディネーターに加え今回も長崎・佐賀からの参画を頂き、2012年の長崎街道開通400周年に向けての取り組みなど意見交換が積極的に行われました。夕刻からは木屋瀬中学校吹奏楽部コンサート「こやのせ・オールスターズ」を開催し、約70名の生徒達の熱き演奏に満席の観客も酔いしれ楽しい夕べを過ごして頂きました。

5日は第8回筑前郷土芸能連絡会議「ジョイント・イン・こやのせ座」を行いました。今回で10回を数え、回を重ねる毎に格調と発展性の高まりを実感いたしますと共に「文化の薫る町づくり」に取り組む木屋瀬住民の志を内外に示すイベントとして成長して参りました事を心嬉しく存じます。

こやのせ座運営部会 山田 靖



### 町作りへの取り組み、着実に